

二人は、「(イエスが) 道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。(ルカ福音書24の32)

They asked each other, "Were not our hearts burning within us while he talked with us on the road and opened the Scriptures to us?"

心が燃える、人は何によってその心が燃やされるのだろうか。遊びやスポーツといったごく普通のことにもそれに似た気持ちになるだろうし、政治やボランティアのような社会的活動、あるいは勉強や研究、仕事、芸術的活動などでもそのような経験をするところがあるだろう。

また、すばらしい景観の大自然に出会ったときにもそれはある。また、人の純粋な愛や行動に触れたときにも、心のなかの何かが燃やされあつく思いがする。

この世に生きているとき、そのようなことが何もなかったら、この世に生きていたいとは思わないだろう。

しかし、たとえ燃やされる経験を持ったとしても、たいていはそれはロウソクの炎のように、ある期間でしかなく、またせっかく燃えていてもこの世の風にふき消されてしまうことが多い。

そのような現状にあって、一度燃え始めると消えることのないような状態、燃え続けるということはいかにして可能であるだろうか。

ここにあげた聖書の言葉は、復活したキリストに関する言葉である。十字架で処刑されたイエスは、三日目によみがえったのであるが、そのイエスが弟子の二人にどこからともなく近づいて語りかけられた。

弟子たちはそれがだれであるか分からなかった。しかし、後にともに食事をするとき、目が開かれてイエスだと分ったのであった。そして、復活したイエスとともに道をおもっていたとき、かつてないような不思議な、印象的なことが彼らの内に生じた。それが「心が燃え続けた」(\*)ということなのである。

(\*) 原文では、進行形が用いられていて、継続のニュアンスがある。そのためこの英訳では過去進行形で訳されている。

それは、復活のイエスによるものであった。

人の魂を深いところで燃やし続けること、それは二千年前のこの特異な出来事に終わるのでない。それ以後、無数の人たちの心は、よみがえった主イエスによって、またそのイエスの別の現れである聖霊によって燃やされ続けているのである。主イエスの十字架の死以後、わずか数十年でローマ帝国全体に広がっていったのも、そのような力による。

しかし、その燃やす力、聖なる霊を持続的に与えられるためには絶えざる祈りが必要となる。使徒パウロも、「絶えず祈れ、どんなことにも感謝せよ、聖なる霊の火を消すな」と書いている。(Iテサロニケ5の17~19)

現在も、私たちの日々の生活において、しばしば生活の単調さやどうにもならない困難な問題に直面して意気消沈しそうになるとき、私たちが祈りのうちに主を仰ぐときには、ふたたび心が燃やされてくる。

求めよ、そうすれば与えられる、このイエスの言葉によって私たちも日々聖なる霊を求め、そして与えられ、からだは弱ることがあろうとも、心は常に燃やされたいと願うものである。

## 野草と樹木たら

ツリガネニンジン (キキョウ科) 伊吹山 (標高1377m、滋賀県と岐阜県の県境にある) 2009. 9. 21



この野草の花は、伊吹山の1000メートルを越える山道に見られたものです。このような山地でなくとも、平地の野にも見られますが、徳島では、あまり見られなくなっています。高さは30cm~1mほどです。キキョウの仲間 (\*) だということはその薄紫色や形からも感じられます。

(\*) キキョウ科は、Campanulaceae (ラテン語で、カンパーヌラーケアエと読む) といいますが、それは、ラテン語の campanula (カンパーヌラ) 小さい鐘、鈴を意味する言葉から作られた言葉です。

日本語のツリガネニンジンという名は、花の形と、根がニンジンのように大きいからです。

なお、このラテン語から生じたイタリア語の campanella (カンパネラ) は、人名として使われ、宮沢賢治の銀河鉄道の夜という作品にも、ジョバンニ (ヨハネのイタリア語形) とともに現れるので、なじみのある方も多はずです。

この写真の花は、頂上へ向かう一般の道とは違って、ほとんど人が通っていない山道で見出したものです。天に向かい、また周囲の自然のただなかで、さわやかな声で賛美しているかのような雰囲気があります。この花は、おそらくだれによっても愛され、親しみを感じさせられると思います。

人間には好みや相性というのがあって、だれでもが近づきやすい人というのはそう多くはないと思われます。しかし、自然のこのような野草の花やその姿は、近づくものはだれでもがほっとするようなものをたたえています。キキョウ科のラテン語名のように、清い鈴の音を大自然のなかで静かに響かせているようです。

対立や憎しみ、嫌悪など、入り組んだ人間感情の錯綜するなかで、この花は、そうした混乱に決して巻き込まれない清いすがたを私たちに提示し、神の国を指し示すものとなっています。

(文、写真とも、YOSHIMURA)